

## 2021年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>医療系大学生のキャリアコンピテンシーに関連する支援の検討</b> ー進路意思決定と母子の信頼感や自己肯定意識の影響についてー
キーワード	①キャリアコンピテンシー、②親子間の信頼感、③自己肯定意識

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ハマ ユキエ 破魔 幸枝
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	神戸常盤大学短期大学部 講師
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	神戸常盤大学短期大学部 講師
プロフィール	歯科衛生士として35年勤務し、臨床の場では地域医療に従事、教育の場では歯科衛生士養成機関で教員として勤務した。また、保育士・幼稚園教諭専修の資格を活かして、幼児教育特に障害児教育にも携わった。

### 1. 研究の概要

#### ①研究の特色

- ・教育心理学と臨床心理学の両視点から関連を検討することで、大学生に特化したキャリアコンピテンシーに関連する支援の検討を研究の特色としている。
  - ・キャリアコンピテンシーは社会人を対象とする研究は数多くあるが、大学生を対象とする研究が少ないため、この研究が重要な効果を得るのではないかと考えた。
  - ・キャリア教育は、教育学としておこなわれていることが常であり、心理学的な要因を加えた教育は考えられていない。
- 教育心理学的な検討をおこなう必要性を感じた。

#### ②独創性

- ・国内の研究動向としては、進路決定の達成・評価、進路決定のプロセス、進路決定時・決定後についての研究が多い。ところが、海外ではそれに加えて進路決定の際の困難さに対する研究も多くおこなわれており、両親との関係性も示唆している。
- 本研究者は、進路決定のプロセス単体ではなく、他の要因も検討すべきではないかと考えた。

### 2. 研究の動機、目的

#### ①動機

先行研究で医療系女子大学生を臨地実習の前後で調査し、自己肯定意識の自己否定が高い学生は単位未修得者となっていることから、学修効果や職業意識に関連があることを報告した。自己肯定意識を高めるためには学修支援はもとより、学生生活の支援も不可欠と考え、学生の心の支援が重要なのではないかと気づいた。そこで、学修に障害を来す学生個々に悩みや問題を聞き取り調査していくと、青年期の発達心理から注目される友人関係のトラブルに反し、母子の関係に対する問題が表出した。

## ②目的

医療系大学生のキャリアコンピテンシーに関連する支援のため、職業選択の意思決定と母子の信頼感や自己肯定意識が影響を及ぼすと仮定し、検討することを目的とした(図1)。幼児期・児童期の愛着と青年期の対人関係は影響があると言われている。また、自己肯定感は愛着と関連があると言える。学生のキャリアコンピテンシーの検討をするためには、職業選択の問題点やプロセスのみに注視するのではなく、学生の本質に注目すべきであると考えた。様々な研究において、自己効力感と自己肯定感に関連があることは発表されている。そのことから、自己肯定意識も就職活動への影響があり、職業選択の困難さに関連があるのではないかと考えた。

## 3. 研究の結果

2021年12月にK大学およびK大学短期大学部において、進路意思決定の困難さ尺度、自己肯定意識尺度、親子間の信頼感の尺度の3尺度について質問紙調査をおこなった。研究調査に同意を得られた医療検査学科1年30名・4年38名、看護学科1年19名、診療放射線学科1年30名、K大学短期大学部口腔保健学科1年34名・3年28名、合計179名の回答より分析をおこなった。

進路意思決定の困難さは、学年により質問項目の結果に差があったが学科によってはその差が違ふことから、学生の意識の違いや学力など背景や環境の影響もあるのではないかと感じた。自己肯定意識と親子間の信頼感は分析すると相関があり、幼児期と青年期の継続する影響は否めないと考える。進路意思決定の困難さと自己肯定意識の分析からも質問項目によっては相関があることから影響が推測できる。しかしながら、学科や学年によって差が生じているため、統一した検討結果を示すことが難しい。このことから、さらなる継続研究および質的研究の変革をおこない、個々に対する分析を試みる必要がある。

## 4. 研究者としてのこれからの展望

2019年度、文部科学省より専門職大学・専門職短期大学・専門職学科の創設が発表され、2020年度はすでに11校が認可されています。そのため、今後専門職を目指して入学する大学生が増加することが予想されます。大学教育として今まで以上にキャリア教育が求められ、キャリアコンピテンシーの教育が重視されるのではないかと考えています。学生の抱える職業選択に関する様々な問題や課題を、学生が能動的に解決の糸口をみつけられるようなキャリアコンピテンシーの教育に貢献することが研究者として私の目標です。これまでの経験を活かし、益々のスキルを磨き、実現可能な教育を目指したいと思います。

## 5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは、本研究を採択くださり、心より感謝申し上げます。この研究は、文化の違いもあり、キャリア選択のプロセスの研究が多い日本は最終的な職業選択の意思決定に繋がりにくいと感じていました。海外ではキャリアコンピテンシーに関する研究がとて進んでいます。本研究は量的研究より職業選択の困難さへの影響を検討しましたが、大学4年間の成長発達の変化に注視しました。個々の変化を検討するためには、質的研究を含めた分析の必要性を改めて痛感することができました。継続して研究をおこなうことで、さらなる学生支援に貢献できる結果を導きたいと考えています。

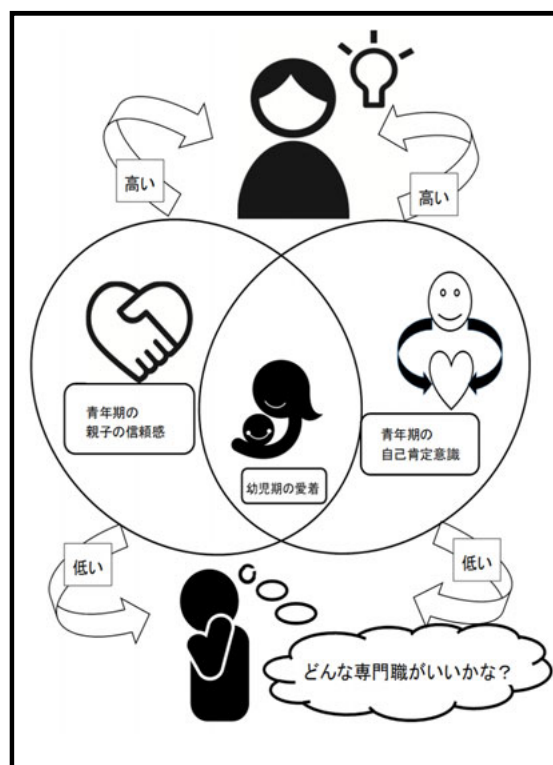


図1 職業選択の意思決定の影響